

二つのミンゾク学再考

——柳田國男にみる翻訳解釈の揺れをめぐって——

板
橋
春
夫

はじめに

本研究で取り上げる二つのミンゾク学とは、「民族学」と「民俗学」のことである。日本民族学会は昭和九年（一九三四）の設立であり、民間伝承の会は昭和二十四年（一九四九）に日本民俗学会と名称を変更した。この年から二つのミンゾク学会が並立することになった。現象上では、解決済みとなった二つのミンゾク学の問題である。敢えて組上に載せるのは、翻訳解釈と学問の本質に関わる重要な論点が存在しているからである。^①

柳田國男は、英語とドイツ語の翻訳解釈にあたつて思索を二転三転させていた。「民俗学の現状」（一九二六年）では、Folkloreを民俗学、Ethnologyを土俗学と訳してはどうかと提案した。『青年と学問』に収録された「Ethnologyとは何か」（一九二六年）では、Ethnologyを民俗学と訳したいが、民族学と訳したほうが良いという意見もあり決めかねると悩みを吐露した。柳田は、Ethnologyを「民俗学」、エスノグラフィ（Ethnography）を「民俗誌」と訳した。ドイツでは、自国民俗学（Volkskunde）とし、諸国民俗学（Völkerkunde）の二つに分けているといい、自国民俗学を「民俗学」、諸国民俗学を「民族学」と訳そうとしていた。以上の翻訳解釈の揺れを見ただけでも、柳田がFolkloreとEthnologyの翻訳の区別について悩み続けていたことが判るであろう。

本研究の目的は、日本民俗学の確立期、柳田が海外の学問を受容・咀嚼していく過程において、どのような思索の揺れがあったのかを確認し、その事実を日本民俗学史に反映させることにある。翻訳解釈に限定された問題であるが、日本民俗学史においては、二つのミンゾク学の問題として再考すべき点がいくつもある。そのために、①柳田は、なぜ「民俗学」という用語の使用を逡巡していたのか、②柳田は「民俗」の用語をどう理解していたのか、③柳田はどのような経緯で「一国民俗学」や「世界民俗学」という用語を使い始めたのか、という三つの課題を探究していきたい。

一 明治四十三年刊『石神問答』にみる「民俗学」の使用例

柳田國男は、「民俗学」の用語を明治四十三年（一九一〇）五月刊行の『石神問答』の中で二か所使っている。これが最も早い時期のものであろう。同書は書簡集という性格を持っているので、当然書簡の中で、ごく自然な形で用いられたものであった。

「民俗学」の用語が使われた一か所目は、第一信の書簡にある。これは柳田から山中共古宛書簡である。この中で柳田がシャクジと呼ばれる路傍の神について研究を始めたいと考え、その先駆的な研究者である山中宛に「従来御心付のことも候はゞより／＼御聞せ被下度、民俗学の専門家出で候は何れの日とも期し難く候」と書いた（柳田 一九九九 五〇五）。民俗学の専門家が出現するまでは、山中先生に教えを乞いたいという趣旨の文章中で使われた。柳田は、ごく自然に「民俗学の専門家」と書いたが、この場合の民俗学はいわゆる Folklore で良いと考える。

「民俗学」の用語が使われた二か所目は、第一五信の書簡にある。これは柳田から喜田貞吉宛書簡である。神籠石について柳田は自論を述べた後で、「何故に諸国到处に此の名の石あるかに就きては 別に必ず民俗学上の理由なかるべからず」と書いた（柳田 一九九九 五四三―五四四）。喜田貞吉宛であるから「民俗学」の用語を敢えて使ったのかもしれない。いずれも学問の成長過程で出てくる「民俗学」の用語である。筆者は、第一信の山中共古宛書簡を見る限りでは、明らかに現在の「民俗学」の使用法に近いと思う。つまり Folklore の民俗学であり、Ethnology の民族学ではないと思う。

『石神問答』刊行の二年後、すなわち明治四十五年（一九一二）に「日本民俗学会」が設立された。東京帝国大学を中心とするメンバーが参加し、評議員には井上円了・加藤玄智・坪井正五郎・芳賀矢一・高木敏雄らが選ば

れている。学会設立から少し遅れて、大正二年（一九一三）に石橋臥波を編集主幹として雑誌『民俗』が発刊された。「本誌の本務」（無記名）の中で、VolkerkundeとFolkloreを「民俗学」と訳した。同誌は五号で休刊となり、学問的潮流を築くことは無かった。柳田にしてみれば、最初に「日本民俗学会」と「民俗」が柳田の関わりない場面で使われてしまった。雑誌『郷土研究』の編集を一緒にやっていた高木敏雄が、「日本民俗学会」の評議員になっていた点を含めて、柳田の気分をかなり悪くしたものであったと推測できる。

二 西村真次による雑誌『民族』の批評

柳田は、大正十年（一九二一）からスイスのジュネーブの国際連盟委任統治委員として海外にいたが、関東大震災の連絡を受けて帰国することになった。帰国後間もなく、岡正雄・有賀喜左衛門・田辺寿利ら若い研究者たちと一緒に雑誌『民族』を大正十四年（一九二五）に創刊した。ちなみに、雑誌『民族』は、柳田が名付け親である。順調に発行を続ける中、読後感を数名に依頼した。依頼された一人である西村真次は、本質を突いた鋭いコメントを投稿した。西村は、大正十五年（一九二六）十一月発行の『民族』二巻一号に「『民族』第一巻読後感」を執筆した。その中で西村は、名称に関して以下のようなコメントをした（傍線筆者）。

第一に『民族』が出るといふことを知った時に、なくてはならぬ、疾くにあつて然るべき雑誌が出ることになったのは嬉しいことだと思つた。発行者に対して其勇猛な大胆な実行を感謝する心が続行した。第二に『民族』第一号を手に入れた時、何といふ品のよい、小ざつぱりした、美しい、キスしたいやうな雑誌だらうと思つた。それについて直ぐ起つた考へは、題名の『民族』といふ語のことだ。私達は『民族』といふ語を常に『国民』といふ語のシノニムに使つてゐるので、かうした内容をもつた雑誌には『民俗』とした方がよくないかと思つた。

『民族』は恐らく“Ethnologie”“Folkerkunde”から取つた名前であらうし、其事は岡正雄君の『民族学の目的』（二の二）といふ訳文で感づいたが、私達は其学統からいつも“Folklore”といふ語を用ひ、それを『民俗学』と訳してゐるので、何だか『民俗』の方がよささうに思はれた。体質と文化との双関であるところの民族といふものを取扱ふのは不似合と思つたからだ。又エトノロギならば人種の意は体質的意義が勝つのではない^(カ)と思はれる。^(西村 一九二六 一二一―一二二)

西村は、誌名としては「民族」ではなく、「民俗」のほうが似合うと述べた。その理由として、Folkloreは「民俗」と訳すべきと考えたのである。アダム・ブロンソンは、論文「境界の攻防―戦前の柳田による歴史学・民族学批判と戦後民俗学―」の中で、雑誌『民族』を外部から批評した西村真次を取り上げて重要な指摘をしている^(ブロンソン 二〇二二 五八―六四)。ブロンソンは、雑誌『民族』の「族」を別の漢字にすることを提唱した⁽³⁾点に着目し、以下のように指摘した。

当時イギリスで用いられた用語の語義的重なりを踏まえれば、日本語においてフォークロアとエスノロジーの訳語が基本的に互換可能であつたことも驚くにあたらない。この曖昧さが、もともとの英語の語義に由来している以上、西村がイギリスの学界の権威に訴えてみても、『民族』の誌名問題が解決できる望みは薄かつた。^(ブロンソン 二〇二二 六四)

雑誌『民族』は、昭和四年（一九二九）四月に休刊した。雑誌『民族』とは入れ替わるように、同年七月に雑誌『民俗学』が民俗学会から発刊された。民俗学会は雑誌の発行前から「民俗学談話会」と称する例会を開催していた。柳田はこの例会はもちろん雑誌の運営に一切関わっていない⁽⁴⁾。この民俗学会は、現在の日本民俗学会

とは無関係の団体である。

雑誌『民俗学』は、西村の指摘した通りの「民俗学」を採用した。しかし、雑誌『民俗学』の内容は、むしろ Ethnology (民族学) に関する論考が多く載った。雑誌『民族』と雑誌『民俗学』は、二つのミンゾク学の問題を胚胎していた。名称に限定すれば、西村真次が『民族』第一巻読後所感で提示した推奨例の通りになったのである。西村は、雑誌『民族』は民俗学関連の論考が多いから「民俗」が似合っていると端的に述べた。西村の指摘はおそらく正解であった。雑誌『民俗学』は「民俗学」の誌名を冠しながら、実態は民族学(文化人類学)に比重がかかっていた。雑誌『民族』は民俗学の論考が多く、雑誌『民俗学』は民族学の論考が多いというねじれ現象を起こしていた。ブロンソンが指摘したように、一九二〇年代はフォークロアとエスノロジーの訳語が互換可能の時代であった。民俗学と民族学という二つのミンゾク学が渾然一体となっていた当時の学問環境を反映していたと言えよう。

三 柳田國男による Folklore と Ethnology の理解

柳田自身は Ethnology と Folklore に関してどのような理解をしていたのか。「民族学」と「民俗学」という二つのミンゾク学について語った論考を取り上げてその思索の揺れについて確認しておく。たくさんある論考の中で二つのミンゾク学に触れた論考を中心に取り上げて、用語の使用法を検討してみたい。

(1) 「隠里の話」における用語の改正

「隠里の話」は、大正七年(一九一八)二月二十日から三月十六日まで一四回にわたって、「東京日日新聞」に連載された。連載は一四回であったが、単行本の収録にあたって一五節になっているという(赤坂 一九九八

六五八―六五九」。大藤時彦は、新聞連載では「土俗学又は民譚学の現在の進歩程度では残念ながら消極的にも積極的にも、何の決定も下し得ぬことが明白であるからである」という部分のうち、「土俗学又は民譚学」の文字が「民俗学」に改められているという。これは昭和九年（一九三四）六月十五日に小山書店から刊行された。この時期には「民俗学」を採用している（大藤 一九七三 三五）。上述したように、昭和九年（一九三四）頃には、柳田は「土俗誌」あるいは「土俗学」という言葉を使わなくなる。この時期は、「土俗学」を使う環境ではなかったと思われる。

（2）Folkloreの訳語としての「民間伝承学」と「民伝学」

大正十年（一九二一）一月二十八日、折口信夫は「民間伝承学講義」の中で、「Folkloreを民間伝承学、または民伝学というのは、非常に新しい名前である。柳田国男先生がその意味を適確に表わすために、土俗学、民俗学という名と区別せられたのだが、それを先生がまた公に使われぬうちに、私がまず、使うのである」と語った（折口 一九七一 一一）。これを読むと、Ethnologyの訳語は「民俗学」で、Folkloreの訳語としては「民間伝承学」や「民伝学」を考案していたらしい。まだ確定していない状況のことである。この講義録は『折口信夫全集ノート編』七巻所収である。

（3）『青年と学問』における「民俗学」

大正十五年（一九二六）四月二十二日、柳田は日本社会学会の講演「民俗学の現状」で民俗学の用語について語った。この講演録は「日本の民俗学」と改題されて、『青年と学問』に収められ、昭和三年（一九二八）四月に日本青年館から刊行された、柳田の初めての民俗学理論書と言えるだろう。同書は一〇本の講演記録から成っており、講演の筆録であるために読みやすい。本研究が対象とする「民俗学」の用語が用いられたのは、

「日本の民俗学」の中であつた。「先づ名前が問題になる」という見出しがあり、以下のように語られた（傍線筆者）。

先づ最初に爰にいふ民俗学とは何か。耳馴れぬ語だから一応は主催者側と打合せて、誤解の無いやうに置かなければならぬ。自分としては今日迄、実はまだ此名称を使つては居なかつた。併し段々成長して行く者が、名無しの権兵衛では不自由さも不自由だから、仮に斯うでも言つて置かうかと思案して居た所であつた。諸君は多分之を英語で謂ふフオクロア、又はエスノロジの意味に解して居られるのであらう。此二つの中ならば私の方でも差支は無い。其積りで日本の民俗学の現状を御話して見ようと思ふ。但し二つの英語のどちらに該当して居ても差支無しといふことは、或はあまり大ざっぱで不精確だといふ御感じがあるかも知れぬが、實際は最近の稍成長したフオクロアは、例へば英国でいへばリバース博士などのエスノロジと、目的及び研究方法に於て大様一致する所まで来て居るから、何れに解せられても實際に於ては殆ど御答にかはる所は無い。只氣遣はしいのは之を民俗学などと訳する為に、仕事の持場が狭くなりはいしないかといふ点のみである。（柳田一九九八 a 一六三）

この続きを読むと、柳田は二つの名称が混同している点について、「この二つの名称を混同することに、不安を抱く人のあるべきは明かである。併しそんならどうしようか。一方フオクロアを民俗学、他方エスノロジを土俗学とでも訳して」おけば良いだろうと、やや曖昧に語っている（柳田 一九九八 一六三）。

大正十五年（一九二六）の時点では、二つのミンゾク学の話題を持ち出している。大正十五年（一九二六）十一月には、『民族』二巻一号で西村真次が『民族』第一巻読後所感の中で重要な意見を提示していた。柳田はそれを無視というか、知っていたにも拘わらず心配してみせるだけであつた。今風に言えば、危機感が伴っていない

かった。

(4) 仙台放送局「東北と郷土研究」における発言

柳田は、昭和四年（一九二九）九月二十四日、二十五日の二日間、仙台放送局のラジオ番組で「東北と郷土研究」という題名の連続講義をした。その記録は、翌年三元社から『東北の土俗』として刊行された。柳田は以下のような発言をした（傍線筆者）。

白人等が丸で自分等とちがった種族の中に入つて観察した見聞を基礎として、何物かのサトリを得ようとする学問であります。日本は誠にいやな国で、こんなエスノグラフィーを白人から学んで、其方法を自国同胞の考察にまで宛てようとした。さうしてそれを土俗学と謂つて居たのであります。私は感情上この土俗といふ文字を非常にいやに思つて、力めてこれを避けようとして居ります。さうしてその代りに民俗誌・民俗学といふ語を此のエスノグラフィー及エスノロジーの為に宛てたのであります。〔柳田 二〇〇一 三二二〕

刊行された書名は『東北の土俗』である。柳田は放送の中で「土俗」が嫌いなので、Ethnology に対して「民俗誌」「民俗学」を当てた。これを見る限りでは、昭和四年（一九二九）時点はラジオ放送ではあったが、柳田は Ethnology の翻訳として「民俗学」を使っていた。Ethnology を「土俗学」と言うなど使用法は揺れていた。西村真次の意見をほとんど無視していたと考えられる。ラジオ放送から五年後の昭和九年（一九三四）十一月、柳田に激震が走ることになる。

(5) 柳田國男の思索の変転

柳田の論考から Ethnology と Folklore の翻訳の揺れに関わるものだけを取り出して一覧表を作成してみた(表1参照)。これによると、ターニングポイントは大正十五年(一九二六)頃に特定できるであろう。⁽⁵⁾ 柳田は元々、Ethnology の翻訳として「民俗学」を宛てようとしたことが判る。途中から Folklore を「民俗学」と訳し、Ethnology を「土俗学」と訳すようになった。しかし、柳田は日本における「民俗学」は単なる Folklore ではなく、Ethnology に一致する部分があると認識していた。もう少し踏み込んで言えば、柳田は、Ethnology と Folklore は将来一緒になっていくと考えていたのである。

岡正雄は、昭和二年(一九二七)にバーン『民俗学概論』の翻訳書を岡書院から刊行した。巻頭の「訳者小序」で、Folklore の訳語に関して、以下のように記している。参考になる見解である。

我が国に於いては folklore の適確なる訳語は未だ見出されないが、普通には民俗、民俗学などと訳されてゐる。私はこの学問の名称として示す場合は民俗学と訳し、この学問の対象事象を指す時は民間伝承といふ文字を好んで用ひた。(岡 一九二七 五)

岡によると、folklore の適確な訳語が見当たらないという。「民俗学」はその一例の訳にすぎず、学問名称として「民俗学」を使うが、学問の対象に対しては「民間伝承」を用いると述べる。柳田は、「民間伝承」を「民俗学」と相互交換できるものと認識していたはずである。ここでも「民俗学」と「民間伝承」という用語の並立が生じている。

柳田は、南方熊楠の影響を受けながらフレイザーの著作を入手して読み進めていく。大正元年(一九一二)四月から金枝篇を読み始めている。暮れには南方へ五冊読んだことを報告している(高橋 二〇二五 四九)。大

正初期には集中的にフレイザーに親しんでいる。大正十年（一九二一）にはイギリスの Folklore society に入会している。渡欧の時期にあたるが、人類学関連の洋書を計画的に収集、読破を展開していった。英語だけではなくフランス語文献も収集していく。一九二〇年代に洋書の読書が集中している（高橋 二〇二五五七）。その過程において、柳田は Ethnology と Folklore に（？）って熟考していったと思われる。当然のことであるが、外国の学問環境の実態を知れば知るほど、翻訳解釈に悩みが生じたのだと推測される。

表1 柳田國男の Ethnology と Folklore の翻訳一覧

年月・雑誌名・掲載書籍等	Ethnology	Folklore
大正7年（1918） 「隠里の話」 『東京日日新聞』連載		「土俗学」または「民譚学」 （1934年に「民俗学」に修正した。）
大正10年（1921） 折口信夫「民間伝承学講義」 『折口信夫全集ノート編』7巻 （1971）		「民間伝承学」「民伝学」
大正15年（1926）4月22日 「民俗学の現状」（社会学会講演） 『青年と学問』（1928、日本青年館）	「土俗学」	「民俗学」
大正15年（1926）5月18日 「Ethnology とは何か」（交詢社講演） 『青年と学問』（1928、日本青年館）	Ethnology を「民俗学」と訳したいが、「民族学」と訳したほうが良いという意見もあり決めかねている。	
昭和4年（1929）9月24、25日 「東北と郷土研究」 仙台放送局の連続講義	「民俗学」「民俗誌」	「庶民生活誌」 （Folklore は Ethnology の一分野と考えていた）
昭和6年（1931） 「郷土研究の将来」 『国史と民俗学』（1944、六人社）	「比較民族学」	「一国民俗学」

四 民俗学理論書にみる二つのミンゾク学

(1) 「民間伝承論を学ぶ会」の連続講義

第三節でみたように、柳田は Ethnology と Folklore に対する翻訳に揺れを見せていた。それは民俗学理論の構築とともに変化していく。柳田は、昭和八年（一九三三）九月十四日から十二月十四日まで民間伝承論の講義をしていた。毎週木曜日の午前九時から正午頃まで成城の柳田家の書斎「喜談書屋」で、約三時間にわたって講義が行われていた。聞き手は、後藤興善、大藤時彦、大間知篤三、杉浦健一、比嘉春潮らであった。翌昭和九年（一九三四）から始まる山村調査で活躍する若手研究者たちであった。筆記は後藤興善が担当した。そこで柳田は以下のように語った（傍線筆者）。

日本では将来完成すべきフォクロアの学問を民俗学と訳さうといふ説があるならば、それに私は反対しない。又その範囲が旧い二三の国よりも広くなつても趣意さへ一貫して居れば結構だと思ふ。たゞ一つの条件は是と一面の類似をもち、しかも方法と本質の異なるエスノロジーを「民族学」と同音で訳しては困るといふことである。
〔柳田 一九九八 d 三三〕。

上記を見ると、柳田は「Folklore = 民俗学」は諸であるが、「Ethnology = 民族学」は否と主張した。すなわち、二つのミンゾク学が並立するのは困ると考えたのである。『民間伝承論』が出版されたのは、昭和九年（一九三四）八月二十日であった。柳田が若手の研究者の前で語ったことは、二つのミンゾク学への懸念であった。しかし、その数か月後、柳田の懸念が現実のものになってしまった。翻訳の主張が遅れたとも言える。

この昭和九年（一九三四）に始まる山村調査にあたつて、同年四月に柳田の書齋に「郷土生活研究所」を設置したのである。この組織は名目的とは言え、対外的には公式の組織と認識されていた。これに民族学系の人たちが大きく反応し、それが民族学会の結成を刺激していったと推測される。

（2）『郷土生活の研究法』における二つのミンゾク学

柳田は、昭和十年（一九三五）八月十八日刊行の『郷土生活の研究法』の中で、「一国民俗学」について、以下のように説明した（傍線筆者）。

自国人が同胞の間の伝承を採集調査するのがフォルクスクンデ、前者即ちどこことなく広く他民族の生活を記述するものがフェルケルクンデと呼ばれて居る。（中略）独逸人が発明したこの自他内外二つの学問は、實際適切な訳字の選定に難儀をする。私はかりにフォルクスクンデの方を「一国民俗誌学」、または「日本民俗誌学」、今一つのフェルケルクンデを「万国民俗誌学」、もしくは誤解の虞がないならば「比較民俗誌学」と名けて置いて、他日ひとつと好い語があつたら取替へることにしようと思ふ。さうしてこの知識が十分に整理せられ、一つの体系を以てこれに臨むことが出来、たとへばフォルクスレエといふ語が用ゐられてもよい時節が来たら、始めて我国でも堂々と日本民俗学と名乗つても、未だ必ずしも遅しとせぬであらうと信ずる。（柳田 一九九八 d 二三二—二三三）

同書を見ていくと、柳田は「日本民俗学」の用語の使用に関しては大変慎重であつた。筆者は、昭和十年（一九三五）が大事なエポックになると考えている。それをいくつかの事例から明らかにしてみたい。大藤時彦『柳田國男入門』に、以下の記載が見られる（傍線筆者）。

柳田先生は民俗学を広義の人類学に包括すべきものとして論せられてきたようであるが、これが後年になると史学としての民俗学という立場を強調せられる言説が多くなった。その代表的な著作は昭和十九年に出版になった『国史と民俗学』である。これは最初（昭和十年）岩波日本歴史講座のために執筆されたものであるが、史学のいわゆる無記録地帯を説明する民俗学の任務を、かなり強い語調で説かれたものである。この、史学としての民俗学ということは、先生にとって人類学としての民俗学と矛盾するものではなかった。先に述べた『民間伝承論』は現代史学大系の一冊として書かれたものであり、その中に人類学もまた史学であるとの言があり、「今日の史学」なる一節が設けられ、史学と民俗学との関係を論じられているのである。（大藤 一九七三 三九）

柳田は、いつも史学に対抗していた感があるが、柳田自身は民俗学も史学もそれほど大きな違いがあるとは考えていなかった。注目すべきは、大藤の指摘にあるように、柳田は昭和十年（一九三五）時点において、民俗学は人類学に包括されるものと考えていたようである。それが後に、「史学としての民俗学」へと変化していった。

五 「一国民俗学」と「世界民俗学」の使用例

柳田國男は、『民間伝承論』の中で、「一国民俗学」と「世界民俗学」について、以下のように説明している（傍線筆者）。

我々の民間伝承論が、この広義の人類学の中に、どれだけの分野を現在を持つて居るか、且つ又どれ迄の役目を果すのが相当であるかといふことは、不幸にして今はまだ二つの別々の問題である。私たちは実着の歩みを踏みしめて行く為に、特に先づ一国民俗学の確立を期し、是によつて将来の世界民俗学の素地を用意し、是に

働く人々の習練に資するを順序として居るのであるが、その序幕に於てすらも、既に色々の妨碍に出逢つて居る。是を総世界の人間研究に押し詰め得ないやうな方法が、民俗学の名を占有してゐる。人類学との連絡は一向に省みられて居ない。〔柳田 一九九八c 二五〕

ここに記したのは、「一国民俗学」の提唱であり、「世界民俗学」への展望を語った部分である。柳田にとって、民俗学「フォークロア」と民族学「エスノロジー」との婚約が必要であつた。それが究極の理想だつた可能性もある〔高木 二〇一八 二三―二四〕。岩本通弥は、論文「民俗」概念考―柳田國男が一国民俗学を唱えるとき―の中で、Ethnologyに「民俗学」を宛てたことについて、以下のように記した（傍線筆者）。

外国の事情に疎かつた柳田が、その自己評価を一変させるのは、一九二二年からの訪欧によるジュネーブ滞在以降であつた。帰国後、岡正雄らと雑誌『民族』を立ち上げて、「フォークロアとエスノロジーとの婚約」を説き、一九二六年から一九三二年の間はEthnologyを「民俗学」に宛てたことは、前稿で詳論したので、繰り返さない。〔岩本 二〇二一 一五八―一五九〕

岩本は、「フォークロアとエスノロジーとの婚約」を説いたというが、それは昭和九年（一九三四）の『民間伝承論』の中であつた。雑誌『民族』は、大正十四年（一九二五）の創刊である。そこには九年間の時間差がある。岩本は「前稿で詳論した」と書くが、どの論文を指しているのか不明である。また、別の場所で「二つのミンゾクガクの統合は一九三二年に放棄される」と書いている〔岩本 二〇二一 一七八〕。昭和七年（一九三二）の「食物と放棄した年とされるのか、その理由を示していない。推測ではあるが、柳田は昭和七年（一九三二）の「食物と心臓」の中で「一国民俗学」を語っており、その時点を指している可能性がある。

この「一国民俗学」に関して、佐藤健二が『柳田國男の歴史社会学―続・読書空間の近代―』の中で詳しく論じている。佐藤は『定本柳田國男集』を検索した結果、「一国民俗学」の使用は「食物と心臓」を初出としている。佐藤によれば、「一国民俗学」の使用は単なる便宜的なものであったという〔佐藤 二〇一五 二二七〕。佐藤は以下のように結論づけている。

一九三〇年代の「一国民俗学」は、耳で聞いたら区別できない二つの「ミンゾクガク」（民俗学・民族学）の密接な交流を論ずるための便宜に過ぎなかった。しかも民族学を「万国民俗学」と位置づけ、目標を「世界民俗学」にすえた配置での「一国民俗学」のことあげであった。〔佐藤 二〇一五 二二〇〕

この指摘に関して、岩本は佐藤の見解に異を唱えている〔岩本 二〇二二 一七八〕。しかし、岩本論文は説得力のある反論にはなっていない。佐藤によると、「一国民俗学」の使用例の多くは一九四〇年以降で、戦後のほうが多いという。筆者は、「一国民俗学」の理解に関しては佐藤の見解を支持しておきたい。

六 多様な意味を含む「民俗」という用語

柳田國男は、「民俗」という用語の使用を躊躇した時期があった。岩本通弥の「民俗・風俗・殊俗―都市文明史としての『一国民俗学』―」によると、民俗とは「民情風俗」であって、政府や各県は民俗を民情の風俗として扱い、風俗が開化しているかどうか、民情が質素で奢侈に陥っていないかを問うていた。柳田は、そのような政治的用語を避けて「殊俗誌」を用いたという〔岩本 一九九八a 二九〕。しかし伊藤幹治も指摘しているが、柳田が政治的用語としての「民俗」をいつ使用したかという疑問に岩本は答えていなかった。⁽⁶⁾

その後、岩本は「『民俗』概念考―柳田國男が一国民俗学を唱えるとき―」の中で、「民俗」の用語の整理を試み、古代から近代までの歴史的使用例を考察した〔岩本 二〇二二〕。同論文は労作であり筆者も教唆を受けている。岩本は詳細な事例分析の結果、「民俗」の使用例を一〇種類に分類した。古代の使用例は、①民衆そのもの、②民衆の暮らしぶりの総体、であった。近世期の用例は、③民情・気質・土地柄の意味、④民の習い、⑤平民・百姓、である。近代の用例は、⑥民種（種族）の意味、⑦民族性、国民性の意味である。さらに⑧民族の意味、⑨教化の対象とすべき自民族の同胞（＝啓蒙すべき平民、⑩フォークロアの意味を提示した〔岩本 二〇二一 一六五―一七二〕。岩本は、①から⑩までを時系列に沿って詳細な解説を試みたが、「民俗」の用例を古代から論じたために論点がばやけてしまった。

近世期における「民俗」の用例は、③民情・気質・土地柄の意味、④民の習い、⑤平民・百姓、であった。近代に入ると開国したこともあって国家や民族を考察する傾向が出て、⑥民種（種族）の意味、⑦民族性、国民性の意味が加わった。問題は、⑥「民種（種族）」と⑦「民族性、国民性」に関する理解である。「民俗」を「民種（種族）」と理解すれば、「Ethnology＝民俗」となる。一方、近世期にみられた、③「民情・気質・土地柄」や④「民の習い」の意義を強調すれば、「Ethnolog≠民俗」となる。結論を先取りすれば、近代における「民俗」の翻訳の問題に尽きるのである。柳田は、近世期の用例を熟知していたために、近世の用例と近代の用例とのギャップに目を奪われて翻訳を決めかねてしまったようである。

政治課題としての「民俗」に関しては、室井康成が既に『柳田國男の民俗学構想』で論じている。室井によると、柳田は生涯にわたって「民俗」を多用しておらず、使用する際の「民俗」は、政治的課題そのものであったという。そして、「民俗」の初出は、明治三十七年（一九〇四）と推定される『農政学』に出てくる〔室井 二〇一〇 九九〕。該当部分は「農産物の種類は風土氣候の影響を受け又は民俗に基きて各国同じからず」と記されている〔柳田 一九九九 二二三〕。この場合の「民俗」とは、明らかに土地柄あるいは氣候風土である。柳

田が認識・理解していた「民俗」は、岩本が指摘した近世期の「民俗」であった。つまり、③「民情・氣質・土地柄」や④「民の習い」である。柳田の該博な近世的知識が外国からの新しい概念の翻訳に際して足枷になった可能性が考えられる。

七 日本民族学会の設立とその影響

(1) 日本民族学会の設立

柳田が懸念していた「二つのミンゾク学」の問題は、日本民族学会の設立によって現実のものとなった。昭和九年（一九三四）十一月十日、発起人会が開催されて「我国に於ける民族学の研究を振興しその国際的連絡を計るを以て目的」とする日本民族学会が成立したのである。この新しい学会設立は、柳田にとって衝撃的な出来事であったと思う。それに関連した感想が昭和十九年（一九四四）三月十五日に刊行された『国史と民俗学』（六人社）の「自序」に書かれる。柳田は、以下のような感想を述べた（傍線筆者）。

予め言ひわけをして置きたいのは、十四五年以前、「郷土研究の将来」を公表した頃には、私は民俗学と民族学と、この二つの学問の接続はもつと容易なことの様に樂觀して居た。ところが實際は寧ろ距離が遠くなり、一方は一つの民族の内部の生活に、次から次へと興味ある問題が発見せられるのに釣込まれて、外へ出て働く余裕を欠き、他の一方は又日本以外の諸民族に、学ばねばならぬことが余りに多くなつたので、それを確實にする必要から、今はまだ内外彼此の比較綜合を後まはしにして居る。完全なる分業はなほ続いて居る。しかも両者は耳で聴けば同じ言葉、印刷所は当然のやうに誤植をするのである。斯ういふ状態が来ようとは私は思はなかつたので、二つを文字まで同じ語にして、一方を一国民俗学、他方を比較民俗学と、呼べばよからう位にき

め込んで居たのである。新しい学問の名称などは、もと／＼符号だからどうきめてもよく又話し合ひで変へられるのであつた。然るに一方には官立の研究所、公認の学会も出来た上は、羽翼すでに成る、もう動かすことは不可能であらうし、こちらは又別なのだから別の名をもたねばならぬが、是もさう簡単には適當な名称が見つからない上に、我々はまだ将来の希望を棄てずに居るのである。それで臨機の処置としては、仮に最初の文章に民俗学と書いたものを、民族学と改めることにしたのである。是のみは誤植では無いのだが、たゞ其中には今日謂ふ所の日本民俗学、即世界の諸民族を連ねて、文化の展開を推究する場合に、その学者の属する一国の経歴を中心として、それから出発しようといふ私たちの事業が、包容せられるものと解して貰はぬとや、解りにくいかも知れない。〔柳田 一九九八e 八六～八七〕

上記には、柳田が昭和六年（一九三二）九月、『郷土科学講座』第一冊に収録した「郷土研究の将来」を『国史と民俗学』へ収録するあたつて、用語の訂正をしたという内容である。柳田は臨時の処置として、仮に最初の文章で「民俗学」と書いたものは「民族学」に変更するしたのであつた。Ethnologyを「民俗学」と翻訳していたものを修正することになったということである。翻訳解釈をめぐつて決着を付かなかつたために生じてしまった事後処理であつた。スーパリエリートで自信家であつた柳田にとつては、慚愧に堪えない出来事であつたと思われる。『定本柳田國男集』二五巻に「郷土研究の将来」が収録されている。その論文は、昭和六年（一九三二）九月刊行の『郷土科学講座』第一冊に収録されたものである。『定本柳田國男集』二五巻の「郷土研究の将来」と新版の『柳田國男全集』一四巻の「郷土研究の将来」を比べてみると、「民俗学」を「土俗学」に変更した事実などが確認できる。

柳田は、少なくとも昭和六年（一九三二）時点では、民俗学を「一国民俗学」、民族学を「比較民俗学」と翻訳すれば良いと考えていたのである。ところが、「官立の研究所」と「公認の学会」が出来たので事態が急変して

しまった。「官立の研究所」とは、昭和十七年（一九四二）に設立された文部省直轄の民族学研究所を指している。「公認の学会」とは、「日本民族学協会」のことであろう。その結果、柳田はEthnologyの訳語としていた「民俗学」を、「民族学」「比較民族学」「土俗学」に訂正した。Ethnographyの訳語としての「民俗誌」は「土俗誌」に訂正した。ドイツ語のフェルカーンデの訳語「比較民俗誌」は「比較民族誌」に、フォルクスクンデの「一国民族誌学」は、「一国民俗誌学」に書き替えた。柳田は、上述したように学術用語の翻訳に逡巡していたが、急な変更を余儀なくされることになった。それは柳田が述べたように昭和九年（一九三四）十一月に日本民族学会が設立されたことに起因する。とは言っても、柳田が昭和九年（一九三四）から山村調査を実施するにあたって、昭和九年（一九三四）に「郷土生活研究所」を名目的に設置したことが、民族学会が独立する大きな引き金になった可能性も高いのである。

昭和十年（一九三五）に刊行された『郷土生活の研究法』の書誌紹介が『民間伝承』一号の書誌紹介欄に載る。その執筆者は柳田本人である。なぜ本人が自らの書籍を紹介する文章を書いたのか。それは「民族学」を「民俗学」と改め、フォークロアを「日本民俗学」と呼ぶという提案は時期が早いので採用しないとわざわざ明言することにあつた。これは明らかに、日本民族学会の設立を意識した文章である。この時点で、柳田の頭の中でEthnologyの翻訳は「民族学」に決定したのである。

当時、柳田を中心とする「民間伝承論を学ぶ会」は、洪沢敬三のアチック・ミューゼウム関係者と情報交換などの協力関係がなかったのだろうか。なぜもっと早く自分たちの学問の名称は、「民俗学」であると高らかに宣言しておかなかったのだろうか。それは柳田が理論に弱いか、西洋の学問に疎いという次元の問題ではないと思う。柳田と折口は、フォークロアを独立の学問として主張することに極めて慎重な態度をとってきた。なぜ長い間にわたって逡巡してきたのかという学問的な問いがなされるべきである。柳田は、「郷土研究の将来」で以下のようなことを述べている（傍線筆者）。

我々はいつも翻訳の為に悩まされて居る。一度気まぐれにきめてしまった用語が、却つて後々の理解を妨げて居る例は、土俗学でも考古学でも皆さうのやうである。フオクロアといふ語なども、当初英国の二三子に由つて採用せられた時の意味と、現在の心持とは余程變つて居るのみならず、其中間にも亦何度かの推移があつた故に、下手に通弁すればどれかを取落す懸念があるので、どの国でも今に原の語を使つて居る。私は是がエスノロジーの土俗学と合体して、一つの學問となる時まで、それも格別遠い未來でも無いから、先づ此俥にして置く方が便利だらうと思つて居るが、人によつては之を俚伝學と謂つたり、又實質に基づいて民間伝承學とも言つたりする。實際はまだ獨立した一派の學では無いのである。〔柳田 一九九八e 一三九〕

當時の柳田の考えは、以上の通りである。これに関して、既に大藤時彦が『日本民俗學史話』の中で指摘している〔大藤 一九九〇 五二―五三〕。「民族學」が急成長した背景には、日本をめぐる國際環境が大きく作用していたと考えられる。滿州事變が起こつて、日本は十五年戰爭に突入した時代背景がある。民族學會が設立されたとき、日本は植民地時代に突入していたのであつた。結果論であるが、民間傳承の會はアジア太平洋戰爭の戰爭協力の問題にほとんど巻き込まれることはなかつた。それは民間傳承の會即ち民俗學の立場がネイションを扱わなかつたことでもあつた。

(2) ミンゾク學の分立

雜誌『民族』は、大正十四年（一九二五）十一月に創刊し、昭和四年（一九二九）に休刊となつた。時を置かず、昭和四年（一九二九）七月には、雜誌『民俗學』が創刊された。雜誌名に使われた「民族」と「民俗學」の用語に關し、當時の學問環境では、「民族學」はエトノス (ethnos) としての民族の文化を対象にする學問と理解されていた。一方、「民俗學」はネイション (nation) としての民族の中に傳承される民俗を対象とする學問であると考

えられていた。これは現在の学問環境からみると、定義の理解は大きく異なっている。

民族学と民俗学という二つの組織は、制度的にも分離した。昭和九年（一九三四）十一月に日本民族学会が設立され、翌十年（一九三五）一月には会誌『民族学研究』が創刊されたことによる。これによって Ethnology の学問は、日本では「民族学」の名称として確定した。一方、民俗学のほうでは、昭和十年（一九三五）七月三十一日から八月六日まで七日間連続の「日本民俗学講習会」が日本青年館で開催された。その講義に参加した人たちの熱望によって「民間伝承の会」が結成された。雑誌『民間伝承』の創刊はその翌年であった（伊藤 二〇〇六一六）。つまり、昭和十年（一九三五）を一つの区切りとして、「民族学」（日本民族学会、二〇〇四年に日本文化人類学会と改称）と「民俗学」（民間伝承の会、一九四九年に日本民俗学会と改称）という二つのミンゾク学は、制度上において分立することになった。会員には両方のミンゾク学に重複所属する例が多々見られたが、制度上は別組織となったのである。二つのミンゾク学の関連は、表2のようになる（表2参照）。

八 二つのミンゾク学の類似性と交流

柳田は、日本民俗学講習会の五日目、すなわち昭和十年（一九三五）八月四日午前八時から「採集期と採集技能」と題した講義を行った⁷。講義の冒頭で、柳田は以下のように、幾分強気な発言を始めたのである。

日本の学界にはミンゾクガクというふものが現在には二つある。我々はなんとしてなりとも、この二者の差別を明かにすべき必要に迫られてゐる。一番手短かと思はれる方法は、何れか一方の名を改めることである（柳田 二〇一〇 四一一）

表2 二つのミンゾク学の関連年表

年月日	概 要
明治43年 (1910) 5月20日	柳田は『石神問答』(聚精堂)の山中共古宛書簡(第一信)に「民俗学の専門家出で候は何れの日とも期しがたく候」と書き、喜田貞吉宛書簡(第一五信)に「何故に諸国到处に此の名の石あるかに就きては別に必ず民俗学上の理由なかるべからず」と書いた。
明治45年 (1912) 5月	「民俗学会」が創設。
大正2年 (1913) 1月	雑誌『郷土研究』が創刊。
大正2年 (1913) 5月	民俗学会は雑誌『民俗』を創刊。「本誌の本務」で Volkerkunde と Folklore を「民俗学」と訳す。
大正10年 (1921) 1月28日	折口は「民間伝承学講義」で、「Folklore を民間伝承学、または民伝学という」と書いた。
大正14年 (1925) 11月1日	雑誌『民族』が創刊。編輯者岡村千秋。民族発行所。
大正15年 (1926) 4月22日	柳田は「民俗学の現状」(日本社会学会講演)で、Folklore を「民俗学」、Ethnology を「土俗学」と訳した。
大正15年 (1926)	柳田は「Ethnology とは何か」で、Ethnology を「民俗学」、エスノグラフィ (Ethnography) を「民俗誌」と訳した。
大正15年 (1926) 11月	西村真次は「『民族』第一巻読後所感」(『民族』2巻1号)に「私達は『民族』といふ語を常に『国民』といふ語のシノニムに使つてゐるので、かうした内容をもつた雑誌には『民俗』とした方がよくないかと思つた」と書いた。
昭和2年 (1927) 4月10日	バーン『民俗学概論』(岡正雄訳、岡書院)の「訳者小序」で、岡は folklore の適確な訳語は無いが、「民俗」「民俗学」と訳す。学問を示す時は「民俗学」、学問対象を示す時は「民間伝承」を使うとした。
昭和4年 (1929) 4月	『民族』4巻4号で休刊。
昭和4年 (1929) 7月	雑誌『民俗学』が創刊。
昭和4年 (1929) 9月24、25日	柳田は仙台放送局のラジオで「東北と郷土研究」を話す。Ethnology の翻訳として「民俗学」を使った。その内容は、『東北の土俗』(1930年)に収録された。
昭和6年 (1931) 8月10日	『民俗学』3巻8号から裏表紙の英文タイトルが「THE JAPANESE JOURNAL OF FOLKLORE」から「THE JAPANESE JOURNAL OF FOLKLORE & ETHNOLOGY」に変更される。
昭和7年 (1932)	柳田は「食物と心臓」で「一国民俗学」の用語を用いた。
昭和8年 (1933) 9月14日～12月14日	柳田は、民間伝承論の講義で「方法と本質の異なるエスノロジーを『民族学』と同音で訳しては困る」と語った。
昭和9年 (1934) 8月20日	『民間伝承論』が刊行。
昭和9年 (1934) 11月10日	日本民族学会が成立。翌昭和10年 (1935) に雑誌『民族学研究』が創刊。
昭和10年 (1935) 7月31日～8月6日	「日本民俗学講習会」開催(日本青年館)。民間伝承の会の設立。翌年、雑誌『民間伝承』が創刊。
昭和10年 (1935) 8月18日	『郷土生活の研究法』(刀江書院)で、柳田は「Volkskunde = 自国人の民間伝承の採集・調査⇒ Folklore」、「Volkerkunde = 他民族の生活記述⇒ Ethnology」と訳した。
昭和10年 (1935) 12月1日	日本民俗学講習会の記録『日本民俗学研究』(岩波書店)が刊行。
昭和24年 (1949) 4月1日	「民間伝承の会」は「日本民俗学会」に名称変更。
平成16年 (2004) 4月1日	「日本民族学会」は「日本文化人類学会」に名称変更。

柳田は「民族学」を「第二の民俗学」と表現し、「土俗学」「土俗誌」の用語を使おうと思っていると述べた。柳田は、民俗学を「採集の学」であるとした。そして、民族学を「読書の学」であるとするのが簡明であると説明したのである。「土俗誌」の中から「土俗学」が誕生すると考え、「土俗誌」「民族誌学」、「土俗学」「民族学」と理解すれば良いだろうなどと解説した。

柳田は、調査採集の一例として衣食住を取り上げた。灯火の変遷では、「東京から十里余りの一山村では、十五六年前にもう電灯であつたが、多くの家には丸芯・五分芯・三分芯・竹ぼや・丸ぼやの遺物があつたのみならず、紙行灯もまだ壊れずにあつた。その行灯が此辺では既に甚だ近世のもので、老人達の幼時には松のヒデを焚いて居たといひ、現に石製のヒデ鉢といふ物が、屋敷の隅に転がつてゐるのを採集して来た」と述べた（柳田二〇一〇 四一七）。この事例は、大正七年（一九二八）に柳田が中心となつて実施した神奈川県内郷村の共同調査の成果であることは間違いない。柳田は灯火の変遷を図化で示した。この柳田の解説は、地方から参加した人にとっては生活上で実感できる事例ばかりであつた。柳田は、灯火の歴史や衣服の変遷を語る中で、日本は大体において「松の火時代」や「麻衣時代」が久しく続いたと指摘した。そして、それを現在までに変化した過程を調査研究することで、文書に頼らない「国民生活変遷誌」（『日本民俗学』の別名）を目指したいと語つたのである（柳田 二〇一〇 四二〇）。

柳田は、「実験」とは「観察」のことであり、その方法として比較の重要性を強調した。柳田が講演の冒頭で『二つの民俗学』について語りはじめた講演録は、他の人たちの講演記録と座談記録を一緒にして『日本民俗学研究』（岩波書店、一九三五年）に収録された。書名に「日本民俗学」の名称が使われた。日本民俗学講習会の時点で、柳田は自分たちの学問を「日本民俗学」にしようと考えていたと推測できる。

戦後まもなくの昭和二十四年（一九四九）に、民間伝承の会は日本民俗学会と名称を変更した。両方とも「民俗学」と発音するので同音となつたわけである。関係者が部外者に説明するときは、「家族の族の民族学」と

か「人偏の俗の民俗学」などと説明する必要が生じた。その紛らわしさは長く続いた。⁽⁸⁾ 日本民族学会も一つ悩みがあった。世の中は、文化人類学や社会人類学といった用語が一般化した⁽⁹⁾が、学会名称は依然として「日本民族学会」であった。「民族学」と「民俗学」という二つの学問は、互いに交流を続けながら関係を保ってきた。そして、平成十六年(二〇〇四)四月、日本民族学会は「日本文化人類学会」と名称変更を行った。雑誌名は『文化人類学』とし、巻号は旧雑誌の番号を引き継いだ。この時点で、二つのミンゾク学の同音による区別の紛らわしさは解消された。名称変更によって兄弟の学会であるという説明は不要となった。⁽⁹⁾

まとめ

本研究は、柳田國男が海外の学問をどう受容したかを考察した結果、柳田が思索の過程で何度も翻訳を二転三転させたことを明らかにした。柳田の思索の揺れは、二つのミンゾク学の問題を浮き彫りにさせている。柳田が「民俗学」の使用を逡巡した理由は、「民俗」という用語が近世期に「民情風俗」の意味で使われていたことを熟知していたことが原因である。そのためにその用語の受け入れに躊躇していた。

昭和四年(一九二九)七月、雑誌『民俗学』が発刊された。これは「民俗学会」の組織が発行主体で、Ethnology関係の人が多く参加した。柳田と関係しない場面で、「民俗学」の用語が使われた。柳田は、この会の設立に一切関係を持たず、当然寄稿もしていない。この雑誌は昭和八年(一九三三)に休刊となる。そして、同誌の主要メンバーは、「民俗学会」を日本民族学会へと発展させていく。似たようなことが十数年前に起きていた。明治四十五年(一九二二)、東京帝国大学の教員を中心に「民俗学会」が組織された。柳田たちが雑誌『郷土研究』を発行する直前の出来事であった。石橋臥波編集の雑誌『民俗』は、雑誌『郷土研究』に二か月ほど遅れて発行されたが、そこでは「民俗」と「民俗学会」の用語が使われた。柳田は、先を越された思いで地団駄を踏んだに違

いない。柳田はヨーロッパから帰国後間もない大正十四年（一九三五）、雑誌『民族』を発刊した。その際、柳田は「民族」を敢えて誌名に採択した。

柳田は理論書として『民間伝承論』と『郷土生活の研究』の二冊を出版している。いずれも口述筆記である。そのこともあって、折口信夫は柳田に総論を書いて欲しいと何度も懇願していた。それは柳田が構想する「民俗学」の枠組みの提示を望んでいたのであった。柳田は前近代における「民俗」の使用例に慣れ親しんだ世代であった。既にEthnologyに「民俗学」の翻訳を当てはめていた。外部の意見を受け入れる余裕はなかったのである。詰まるところ、柳田は学問の世界における急速な変化に対応できなかった可能性が高い。一方、民族学の若い研究者たちは変化への対応がわずか早かった。その対応に関しては、世代差の違いであったと言えるかもしれない。

筆者は「はじめに」で、柳田がどのような経緯で「一国民俗学」や「世界民俗学」という用語を使い始めたのかという課題の探究を提示した。それらの用語の使用に関しては、柳田が『民間伝承論』の第一章「国民俗学」の中で、まずは「一国民俗学」を確立をさせてから将来の「世界民俗学」のための素地を用意するのだと述べた〔柳田 一九九八c 一二五〕。実は、その部分だけの使用であった。「一国民俗学」の用語は、佐藤健二が論じたように、二つのミソゾク学をわかりやすく区別するためのものに過ぎなかったのである。そして、柳田は「世界民俗学」に関して、それ以上は話題にしないのである。あくまでも論展開の中で用いられた用語であったと言えよう。敢えて「世界民俗学」の用語にこだわらずとも、「比較民俗学」の用語で十分に議論が深められる問題であると考ええる。

大藤時彦は「学問研究において、その名称の如きは第二義的な意味しか持たない」と述べた（大藤 一九七三三七）。この考えは、上述したように柳田が『国史と民俗学』で述べた考えと同じであった。しかし、筆者は学問の名称は研究の指針を示す重要な看板であると考えている。柳田は自分の構想した学問の看板を出すのを躊躇

している中、昭和九年（一九三四）に日本民族学会が設立された。この出来事によって、柳田は「日本民俗学」の看板を遂に出せなくなったと悟り、熟慮の末に自分たちの学会を「民間伝承の会」と命名したのである。戦後、九学会が共同で学術調査を展開させた。昭和二十四年（一九四九）三月一日の夜、折口信夫が代表して、「民間伝承の会」を「日本民俗学会」に改称することを柳田に頼んだ。すると、柳田は突然、折口に語気鋭く怒りの言葉を発した。柳田が一五年間にわたって問題にしてきた名称が変更された（鎌田 二〇〇二 一三七）。明治四十五年（一九二二）に「民俗学会」が創設されたので、三七年の年月を経て日本民俗学会を公称できるようになった。しかし、その時点で、柳田が音が同じで困ると心配した「二つのミンゾク学」の呼称問題が現実化した。二つのミンゾク学は、翻訳解釈と学問の本質に関わる重要な問題であった。それが現象上で解消されたのは、五五年後の平成十六年（二〇〇四）四月であった。

《注》

- (1) 一九八〇年代のことである。筆者は、民俗学を説明するときに「家族の族ではなく、人偏の俗の民俗学のほうです」などと説明していた。日本民俗学会と日本民族学会は同じ発音であったことから生じる問題であった。伊藤幹治は、『柳田國男全集』一四卷所収の「国史と民俗学」の解説で、民俗学と民族学について民俗学 (Folklore) は一國または一民族の文化や社会を研究する学問であり、民族学 (Ethnology) は世界の諸民族の文化や社会を比較研究する学問であるので両者は親縁関係にあるとした。柳田は親縁関係にある二つの学問の翻訳をめぐって思索の試行をしたという。特に『国史と民俗学』の中で、大幅な修正が図られたことを指摘した（伊藤 一九九八 六一六―六一九）。その指摘は、後に伊藤『柳田國男と文化ナショナリズム』に引き継がれて詳細に論じられた（伊藤 二〇〇二 七五―八六）。呼び方に関しては決着がついた問題である。

- (2) 雑誌の目次には「『民族』第一巻読後所感」とある。しかし、雑誌の本文中では「『民族』第一巻所感」とあり、「読後」が省略されている。書誌学上は本文記載のタイトルを採用するのが理想であるが、この場合は「読後」の用

語を挿入しないと意味が取りにくいと、敢えて「読後」を入れた。

- (3) 関敬吾が引用した『郷土生活の研究法』にあたる、片仮名を英語表記にするなど正確な引用をしていない（ブルンソン 二〇一二 六五）。これに関して、「訳注」として、訳者の中井真木が「関の引用は柳田の原文に忠実ではない」として原文を紹介している（世界の中の柳田國男 七八ページ）。誠意ある精密な翻訳であると思う。

- (4) 柳田が雑誌『民族』の編集をワンマン的に主導したことが若い編集者たちの反感を買った。そのことが雑誌『民俗学』の発刊につながる。新雑誌は「民俗学会」という組織で運営された。折口信夫は代表格に担がれ、そのことが柳田を一層怒らせる結果となった。折口は柳田との関係を修復させる対応をすすめ、昭和七年（一九三二）七月二日の第六回民俗学講演会で、柳田は「民俗の採集と分類」という講演を行った。これは柳田が「民俗学会」に関わった唯一の出来事であった。大会案内の添え書きに「日本の民俗学は柳田先生とともに成長し、柳田先生を中核として発展してきたと云つても過言でないと思ふ」と賛辞した。大会記事は、類例のないほど、柳田を大いに持ち上げた文章である。むしろこの出来事が、別に民族学会を組織する機運を準備させたとも想像される。

- (5) 岩本通弥は「珍奇なるものから平凡なものへ——柳田國男における民俗学と民族学の位相——」の中で、昭和七年（一九三二）九月一日発行の『郷土風景』一卷七号に柳田が「民族の採集と分類」を載せた点に着目し、Ethnologyを民俗学と訳する提言を放棄した端緒と論じた（岩本 二〇一八 三六）。しかし、この雑誌をよく読めば、「民俗」とすべき用語を「民族」と誤植したことが判る。「柳田國男全集」二八巻の解題担当者の小田富英も同様の見解を採っている（小田 二〇〇一 六五六〜六五七）。つまり、この時点を下限とするのは無理がある。Ethnologyを民俗学と訳した下限は、昭和四年（一九二九）九月の仙台放送局の連続公演「東北と郷土研究」の頃までであった。昭和六年にはEthnologyを「比較民族学」、Folkloreを「一国民俗学」と称している。

- (6) 岩本通弥は、論文「民俗」を対象とするから民俗学なのか——なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか——の中で「民俗」について論じた。前論文「民俗・風俗・殊俗——都市文明史としての『二国民俗学』」で論じなかった明治初期における「民俗」の使用例を紹介した。明治七年（一八七四）に明治政府が各府県に「政治部民俗篇」として人民把握のための習俗として「民俗」を用いるが、民情風俗の略であったという。「民俗」は、庶民への

教化を意識した言葉として使われていた(岩本 一九九八d 二〇〇二二)。

(7) 「採集期と採集技能」は『定本柳田國男集』へ収録する際に「実験の史学」と変えられた。柄谷行人は「実験の史学」という耳あたりの良いネーミングに着目した。柄谷『実験の史学』(岩波新書、二〇一九年)の中で、地球規模の壮大な理論として語った。筆者は、原著のタイトルがどのような経緯で「実験の史学」に変更されたのか追求を試みたことがある。しかし残念ながら、タイトル改名の経緯は十分に明らかにできていない[板橋 二〇二四 三三八〇三一九]。

(8) 柳田は、古野清人が『民族学研究』の編集を引き受けたことの挨拶に来たときに、「民俗学と民族学ではまことにまぎらわしいから、新米の民族学の用語はやめてほしい」と申し込んだという(檜尾 一九九三 一〇四)。また堀一郎によれば、姉崎正治は柳田の仕事に深い理解を示していた。姉崎は病に倒れる前、柳田に向かって「君のやっているフォクロアも、エスノロジーも、どちらもミンゾクガクといっている。どっちかが何とか名を変えてくれないかね」と話しかけたという。柳田はよく、「私のは人偏のミンゾクガク」といい、エスノロジーを「ヤカラのミンゾクガク」と呼んだという(堀 一九七五 二七六―二七七)。

(9) 桑山敬己は、現代民俗学会のシンポジウムの質疑応答時間に発言を求められた中で、「現在は本質主義批判の影響でしょうか、そのようなアプローチは影を潜めています。しかし、私はどうしても民族的なもの、それはフォークと言い換えてもよいのですが、それが根底にあつて、研究対象から外すことはできないのではないかと思うのです。民族学から文化人類学へという改称によつて民族が軽視されたのなら、私は残念に思います」と語った(桑山 二〇一六 六六)。改称の結果、ネイションが失われることになった点を危惧したのであり、傾聴すべき意見である。実は、柳田が逡巡した点もその辺にあつた。筆者は、本稿執筆に先立ってスコット・シュネルと橋本裕之の共著論文「日本の民俗研究の活性化のために」を読む機会があつた。彼らは日本の民俗研究者に見られる非国際性と島嶼性に基づく学問の排外意識と閉鎖性について論じた。民俗学理論が円熟をみせなかった点、研究を国内限定にして国際的文脈で考える努力を怠る傾向があつた点などを鋭く指摘した(スコット・シュネル・橋本裕之 二〇一二 二八七―三〇二)。この論文は、二つのミンゾク学を考える上で参考になった。なお現実問題として、利便性と引き換えにお互いのルーツを意識したり関係性を語ったりする機会が薄れたことを筆者も実感している。

(10) 「二つのミンゾク学」に関して、ほぼ同時期に類似するシンポジウムが開催された。一つは神奈川大学国際常民文化研究機構が、二〇一二年十二月八日、九日の二日間にわたって開催した「国際シンポジウム 二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」である。このシンポジウムは、「二つのミンゾク学」をメインタイトルとし、サブタイトルに「多文化共生のための人類文化研究」を用いた。報告書は、国際常民文化研究機構編『国際シンポジウム報告書IV 二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―』（二〇一三年）として刊行された。報告者六名の論考を見ると、本研究で取り上げた「二つのミンゾク学」に関する議論はほとんど行われなかったようである。その事実、シンポジウムの司会及び総括を務めた渡邊欣雄が「『二つのミンゾク学』の盛衰―過去と現在―」というエッセイの中で、シンポジウム企画段階の腹案と異なった展開になったと批評したことも明らかである。渡邊によると、二つのミンゾク学は、両者の違いを区別しつつ、その類似性と共同研究の必要性を訴えることに意義があったという。渡邊は、もしも海外で日本の「民俗学」を *Ethnology* と翻訳すれば、*Folklore study* よりも正確に理解される可能性があるとして述べた（渡邊 二〇一四 六五）。

二つ目は、現代民俗学会が二〇一四年十二月二十一日、「二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先―グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ―」と題するシンポジウムである。その記録集は、川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先―グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ―』（成城大学グローバル研究センター）として刊行された。質疑応答も収録される報告集である。川田は「曖昧模稜とした同音異義語」であるが、関係を持ち続ける意義を語った。一九三五年に学会が分かれてからも「肉親としてよりも親族として」の関係、「同じ母体から生まれた双生児」と表現され、一九五〇年代まで不即不離の関係は続いたが、一九八〇年代には相互に独立したと評した（川田 二〇一六 一一―一二）。島村恭則は、「二つのミンゾク学」現象は、日本だけでなく、世界中に共通して存在していたと述べ、現在進行するアンソロポロジーとフォークロアの関係もその文脈で捉える必要があるという（島村 二〇一六 二五）。

《参考文献》

- 赤坂憲雄 一九九八 「解題『隠里の話』」『柳田國男全集』七巻 筑摩書房
- 赤坂憲雄 アダム・ブロンソン 二〇一二 「境界の攻防―戦前の柳田による歴史学・民族学批判と戦後民俗学―」R・Aモース・赤坂憲雄編『世界の中の柳田国男』藤原書店
- 板橋春夫 二〇二四 「日本民俗学の創成と確立―椎葉の旅から民俗学講習会まで―」七月社
- 伊藤幹治 一九九八 「解題 国史と民俗学」『柳田國男全集』一四巻 筑摩書房
- 伊藤幹治 二〇〇二 「柳田国男と文化ナショナリズム」岩波書店
- 伊藤幹治 二〇〇六 「日本人の人類学的自画像」筑摩書房
- 岩本通弥 一九九八a 「民俗・風俗・殊俗―都市文明史としての『一国民俗学』」宮田登編『現代民俗学の視点(民俗の思想)』三巻 朝倉書店
- 岩本通弥 一九九八b 「民俗」を対象とするから民俗学なのか―なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか―『日本民俗学』二二五号 日本民俗学会
- 岩本通弥 二〇一八 「珍奇なるものから平凡なものへ―柳田國男における民俗学と民族学の位相―」『超域文化科学紀要』二三号 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻
- 岩本通弥 二〇二一 「民俗」概念考―柳田國男が「国民民俗学」を唱えるとき―『超域文化科学紀要』二五号 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻
- 大藤時彦 一九七三 「柳田国男入門」筑摩書房
- 大藤時彦 一九九〇 『日本民俗学史話』三一書房
- 岡 正雄 一九二七 「訳者小序」バーン編著『民俗学概論』岡書院
- 小田富英 二〇〇一 「解題」『柳田國男全集』二八巻 筑摩書房
- 折口信夫 一九七一 「民間伝承学」『折口信夫全集ノート編』七巻 中央公論社
- 檜尾直樹 一九九三 「野性を回復する方法―宗教学調査の黎明と「宗教誌」の可能性―」『人間科学研究』六巻一号 早

稲田大学人間科学学術院

鎌田久子 二〇〇二 「日本民俗学会発会のころー柳田国男の周辺ー」『日本民俗学』二二九号 日本民俗学会

川田牧人 二〇一六 「私は〇〇〇で民俗学をやっている」川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先ーグローバルでローカルで複数のフォークロア研究へー』成城大学グローバル研究センター

川田牧人編 二〇一六 『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先ーグローバルでローカルで複数のフォークロア研究へー』成城大学グローバル研究センター

桑山敬己 二〇一六 「質疑応答の発言」川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先ーグローバルでローカルで複数のフォークロア研究へー』成城大学グローバル研究センター

国際常民文化研究機構編 二〇一三 『国際シンポジウム報告書Ⅳ二つのミンゾク学ー多文化共生のための人類文化研究ー』(二〇一三年) 国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

スコット・シュネル・橋本裕之 二〇一二 「日本の民俗研究の活性化のために」R・Aモース・赤坂憲雄編『世界の中の柳田国男』藤原書店

佐藤健二 二〇一五 『柳田国男の歴史社会学ー続・読書空間の近代ー』せりか書房

島村恭則 二〇一六 「複数形人類学とフォークロア研究」川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先ーグローバルでローカルで複数のフォークロア研究へー』成城大学グローバル研究センター

高木昌史 二〇一八 「柳田国男と西洋の学問」『民俗学研究所紀要』四二集 成城大学民俗学研究所

高橋 治 二〇二五 『柳田国男の洋書体験』文芸社

西村真次 一九二六 「民族」第一巻読後所感『民族』二巻一号 民族発行所

堀 一郎 一九七五 『聖と俗の葛藤』平凡社

室井康成 二〇一〇 『柳田国男の民俗学構想』森話社

柳田國男 一九九八 a 「青年と学問」『柳田國男全集』四卷 筑摩書房

柳田國男 一九九八 b 「隠里の話」『柳田國男全集』七卷 筑摩書房

- 柳田國男 一九九八c 「民間伝承論」『柳田國男全集』八卷 筑摩書房
- 柳田國男 一九九八d 「郷土生活の研究法」『柳田國男全集』八卷 筑摩書房
- 柳田國男 一九九八e 「国史と民俗学」『柳田國男全集』一四卷 筑摩書房
- 柳田國男 一九九九 「農政学」『柳田國男全集』一卷 筑摩書房
- 柳田國男 二〇〇一 「東北と郷土研究」『柳田國男全集』二八卷 筑摩書房
- 柳田國男 二〇一〇 「採集期と採集技能」『柳田國男全集』二二卷 筑摩書房
- 渡邊欣雄 二〇一四 「二つのミンゾク学」の盛衰―過去と現在― 国際常民文化研究機構編『国際シンポジウム報告書
IV 二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―』 国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科非常勤講師）
（成城大学民俗学研究所研究員）

